

解説

鈴木三男¹：古代の仏像の樹種はカヤであるのか??を再度問う

Mitsuo Suzuki: Re-evaluation of tree species for Japanese ancient wooden statues

本誌6巻2号(1999)に表題のタイトルの解説を書いた(鈴木, 1999)。繰り返しになるが、かいつまんで論点を紹介すると、1) これまで、小原(1963)が全国の木彫像627体の樹種を調べた結果、畿内地方の一木造りの古代の木彫像の使用樹種はほとんどがヒノキであると報告し、それが小原自身の著書(小原, 1972, 1984)を通して広く一般に受け入れられてきた。2) ところが能城修一と藤井智之が唐招提寺や大安寺などの木彫像を再度調べたところ、そのほとんどがヒノキではなく、カヤであった(金子ほか, 1998)、というものである。そして今回、新たに東北から九州に至る地域の8, 9世紀の木彫像など80体の樹種を調べた結果が報告された(金子ほか, 2003)。その結果を表1に紹介するが、これには1998年の結果も含んで丁度100体の樹種同定の結果が載っている。

図1は小原がこの間主張してきた「木彫の用材の流れ図」である。これは1972年の『木の文化』に載って以来、2003年の『木の文化をさぐる』まで、ほとんど変わっていない。また、1963年のレポートでは627体の651資料が扱われているが、1984年の著書には682体、2003年の著書では750体とあるので、新たな資料が少しずつ追加された結果がこの図には示されていると言うことのようにだが、2003年までの追加資料を加えてもこの流れの大筋も小筋も変わっていないと言うことなのだろう。

本誌6巻2号(1999)および拙著(鈴木, 2002)では小原氏と能城氏らの結果がこれほど極端に異なった原因について多少の考察を行ったものの、その原因は杳として分からないと言うのが正直なところである。なぜこうなったのかは分からないが、そこから考えてみなければならないことが幾つかある。まず第一には木彫像用材の変遷である。

ヒノキとカヤを中心に表1の結果と図1とを見比べながら考えていただきたい。表1に見るように一木造りはほとんどがカヤで、ヒノキは1点もなく、様々な広葉樹が少しずつあるのは、これらの像に宮城県から九州までの各地のものが含まれているからである。図1で平安初期のところに

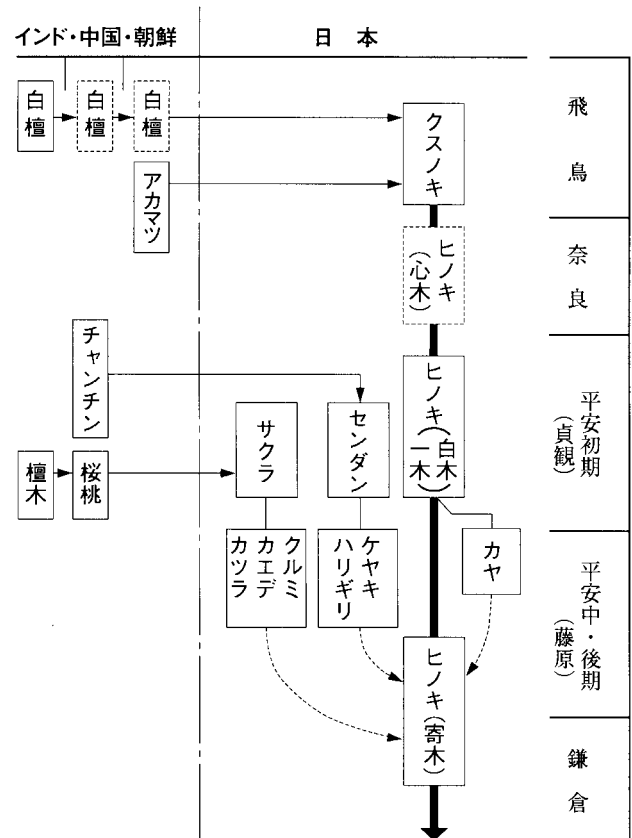


図1 木彫の用材の流れ図(小原, 2003より)。

表1 古代の木彫像の制作技法と樹種(金子ほか, 2003)

樹種名	一木造				一木造・乾漆併用			脱活乾漆造	木心乾漆造	木心塑造	塑造	台座	
	8c	8-9c	9c	9-10c	8c	8-9c	9c	8c	8c	8c	8c	9c	9c
カヤ	15		24	6	3						2		
ヒノキ					1	4		2	5	1	5		
ヒノキ?											1		
スギ											11		
ケヤキ		1							3				
ケヤキ?		4	4						1				
クスノキ													1
クスノキ科	1												
センダン				1									
センダン?									1				
トチノキ		1											
キリ									1				
キリ?							1						
総計	16	6	28	7	4	4	1	2	11	1	19	1	

「ヒノキ（白木，一木）」とあるのは能城らの結果と全く矛盾することは改めて言うまでもない。問題は図1のその上の奈良時代のところの「ヒノキ（心木）」である。表1の一木造り以外のところを見るとカヤは「一木造・乾漆併用」3点と「塑造心木」の2点のみであるのにたいし、ヒノキは「一木造・乾漆併用」から「塑造心木」まで18点もある。勿論、この中には様々な地方のものが含まれているので、畿内中心にこの結果を見直すと「心木はヒノキ」という小原の結果と良く一致することが分かる。良く知られているように畿内の古代木造建築の構造材にはヒノキが一番よく使われており、材質にあった使用で、まさに適材適所の例に挙げることが出来る。心木としてヒノキが使われているのはなるほどと頷けるものがある（小原，1984；鈴木，2002；金子ほか，2003）。しかし、その後、一木造りが主流となり、木肌を直接感じさせるようになると、小原は「白木はヒノキ」といい、金子ら（2003）は「白檀の代用としての栢＝カヤ」と言っている。金子らの一木造り77体のうち、45体がカヤ、あとは様々な広葉樹でヒノキはゼロ、と言う結果から類推すると、ヒノキの一木造りというものがあつたにしてもきつとたいへん少ない数だろうと推測できる。してみると、やっぱり「日本人の白木好みは、和風文化のおこった平安時代の初期からはじまった」というのは考えなおさなければなるまい。

その辺のことを明確に表したのが図2である。これをまとめた能城によると、飛鳥時代のクスノキを用いた一木造りの像作は、小原が言うように心木にヒノキを使う奈良時代の像作を経て平安初期のヒノキ（実際はカヤ）の一木造りへと変遷したのではなく、飛鳥のクスノキの一木造りは奈良時代には一旦途絶え、像作は塑造、脱活乾漆造がもつぱらとなり、鑑真和上による唐招提寺建立を期に、カヤの一木造、カヤ、ヒノキの一木造・乾漆併用、ヒノキ、ケヤキの木心乾漆造が始まり、これが平安時代へと引き継がれてゆくという。小原の図1にはセンダン、サクラ、ハリギリなど他の広葉樹の名も上がっているが、金子らの表1にはこれらの樹種の類例が少ないので、能城は特に図2の中に位置づけてはいないが、ここに挙げられた範囲ではなるほどと頷ける結果である。

それにしても1998年に金子らの報告がでて、それは本誌でも、又拙著（鈴木，2002）でも取り上げた。その後、今年（2003年）になり小原氏は『木の文化をさぐる』を出版されたが、木彫像の用材についての新たなコメントは全くない。尤も、1916年生まれの氏はすでに充分お年であることはよく承知するが、これらの「新著」に書かれていることは1972年、1984年の著書とほとんど変わらない内容で同じ事の繰り返しである。しかし、氏の名著といわれる『日本人と木の文化』が作り出した「日本人の白木

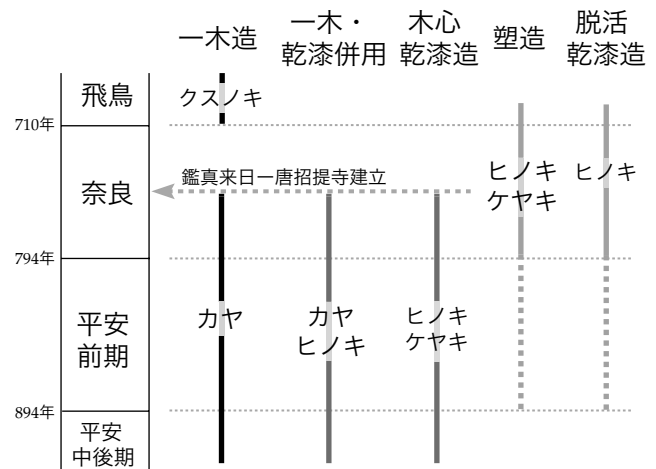


図2 古代の木彫像の製作技法の変遷と樹種（能城原図，未公表）。

＝ヒノキ＝好みは、和風文化のおこった平安時代からはじまった」という「常識」を改める必要があることを、この度の金子ほかの報告が明確に示したことを広く世間に知らせる必要性があるだろう。

で、最期に付け加えると、図1では平安後期以降に「ヒノキ（寄木）」となっているが、これが正しいのかどうか、金子氏らのさらなる研究の展開を是非お願いしたいものだ。

なお、未公表の図を使用させていただいた森林総合研究所の能城修一氏に感謝する。

引用文献

- 金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之. 1998. 日本古代における木彫像の樹種と用材観. MUSEUM（東京国立博物館研究誌）555号：3-53.
- 金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之. 2003. 日本古代における木彫像の樹種と用材観Ⅱ—8, 9世紀を中心に—. MUSEUM（東京国立博物館研究誌）583号：5-44.
- 小原二郎. 1963. 日本彫刻用材調査資料. 美術研究 229号：74-83.
- 小原二郎. 1972. 木の文化. SD選書 67. 217 pp. 鹿島出版会, 東京.
- 小原二郎. 1984. 日本人と木の文化. 239 pp. 朝日選書 262, 朝日新聞社, 東京.
- 小原二郎. 2003. 木の文化をさぐる. 253 pp. NHK ブックス 979, 日本放送出版協会, 東京.
- 鈴木三男. 1999. 古代の仏像の樹主はカヤであるのか？？植生史研究 6: 84-85.
- 鈴木三男. 2002. 日本人と木の文化. 255 pp. 八坂書房, 東京. (〒980-0862 仙台市青葉区川内 東北大学理学研究科附属植物園 Botanical Garden, Graduate School of Science, Tohoku University, Kawauchi, Sendai 980-0862, Japan)
- (2004年1月9日受理)